紹介

元木泰雄・松薗斉編著
『日記で読む日本中世史』

本書は日本中世に記された古記録（非日記）を素材とし、その魅力を一般から研究者まで広く伝えるという主旨のもと編まれた書物である。「入門書的役割」とあるが、その内容は通常の一般書に留まらない。構成は序章及び全一六章の本論、四本のコラム、松薗斉による各時代（中世前期、南北朝・室町期、戦国期）の古記録に関する解説からなり、各々最新の研究成果が存分に生かされた内容となっている。巻末には、中世主要日記一覧（含テキスト情報）、参考文献、古代中世紀行一覧が配され、古記録の所在や書誌情報がまとめられている点も見逃せない。

以下、各論者が個々の視点で日記を読み解いた本論について、その概略を時代順、章ごとに紹介する。まず、中世前期について。『中右記』著者藤原宗忠は白河院政期、天皇・摂関家寄りの位置に身を置き、院権力登場による新たな政治状況に批判的視線を送る（佐藤健治執筆。以下各章の執筆者を（　）内に記す）。後に保元の乱で命を落す藤原頼長『台記』には、稀代の学者たる彼の姿と、兄忠通との摂関の継承をめぐる相克が描写される（元木泰雄）。広範な故実の知識をもって斜陽の摂関に仕えた平信範は、保元の乱に至る混乱の経過を書き記した（佐古愛巳）。続く源平内乱期の過程を詳細に記述した九条兼実『玉葉』からは、存在感を増す東国武士団への眼差が看取される（野口実）。鎌倉幕府の成立後、『明月記』を著した藤原定家は京都歌壇で重きをなす一方、得意の和歌を媒介に院・幕府と関係を結び、古典の書写に励んだ（美川圭）。藤原経光『民経記』には、鎌倉期、ライバルと切磋琢磨しながら朝廷公事の興隆に邁進する筆者の姿がある（尾上陽介）。鎌倉後期、後醍醐天皇という類例のない人物の出現、公家社会の衰微、君臣関係の乱れなどに対して学問的観点から批判を行う『花園天皇日記』からは、屈折を抱える筆者の心理状態が読み出される（市沢哲）。以上からは、公事遂行を旨としながらも、新たな政治状況への対応を模索してゆく公家たちの姿勢が認められよう。

次に、南北朝・室町期について。南北朝動乱の最中、朝廷で確固たる地位を築かんとする洞院公賢『園太暦』からは当時の複雑な政治状況が垣間見え（松薗斉）、軌道に乗った室町幕府において護持僧として重用された満済は、内密の政治的駆け引きを『満済准后日記』に記す（森茂暁）。一方、政治から距離を置いた伏見宮貞成は『看聞日記』に、音楽をはじめとする故実の習得への並々ならぬ意欲を示した（松薗斉）。『蔭涼軒日録』には幕府・守護から貿易船の経営を請負った禅僧たちの活躍がみられ（須田牧子）、甘露寺親長『親長卿記』からは、応仁の乱を迎え幕府が衰退する中で、武家権力を無条件に容認し朝廷儀式の温存を図るという、のちの戦国期的な公家の志向性を窺うことができる（末柄豊）。奈良興福寺の院主尋尊筆の『大乗院寺社雑事記』には、公武を巻き込んで展開した院主職の継承を巡る政治的な係争の様子が描き出される（安田次郎）。以上、中世的な秩序が軋みを見せる中で生きた公家や僧侶などの興味深い多様な動きが活写されている。

最後に戦国期について。『政基公旅引付』

を記した九条政基は守護の所領侵略に堪えかね、自ら家領の和泉国日根野荘に赴き、当地の人々と関係を結びながら直接支配を行った（廣田浩治）。山科言継の『言継卿記』には周囲の庶民生活に振り回される言継の姿があり、これまでになく親近感のある公家像が提示される（清水克行）。室町期以降、武家も日記を記す様子が散見されるが、豊臣秀次家臣の駒井重勝の『駒井日記』は、豊臣政権内の秀次の位置付けを考える格好の素材である（播磨良紀）。これまでに見られない階層の人々が多く日記に登場する点が、当該期の特徴として提示されている。

本論の紹介は以上とするが、このほかコラムなど紙幅の都合で紹介できなかった部分にも、当然ながら研究上重要な情報が多数含まれている。

なお、各章からは各古記録の多様な記述内容に加え、各執筆者の問題意識・記述スタイルの多様さが看取される点は重要である。記述にあたっては各執筆者の裁量に任された点が多いことが記されているが、あるテクストが存在し、そこに如何様な解釈が加えられうるのか、その醍醐味を伝えることに関して本書は大いに成功していると思われる。

（A5判、三五二頁、ミネルヴァ書房　二〇一一年一一月、税別三二〇〇円）

（松井直人　京都大学大学院文学研究科修士課程）

『史林』投稿規定

◇資格　本会会員であること。

◇投稿受付原稿の種類、長さ

論説　1段組54字×19行の体裁で、三二〇〇〇字以内

研究ノート　2段組29字×20行の体裁で、二〇〇〇〇字以内

研究動向　2段組29字×20行の体裁で、三二〇〇〇字以内

史料紹介　2段組29字×20行の体裁で、三二〇〇〇字以内

書評・論文評　2段組、八〇〇〇字以内

紹介　3段組、一二〇〇字程度

◇いずれにおいても、本文や注だけでなく謝辞や図表・翻刻を含めて、それぞれの紙幅に収めること。

◇注は各章末に入れること。

◇「欧文タイトル」を添付すること。

◇論説には「要約」（四〇〇字以内）を添付のこと。「要約」は上記の紙幅制限の対象外とする。

◇論説および研究ノートの投稿者は、掲載が決定した時点で、「欧文要約」（六〇〇～八〇〇語程度）を提出すること。なお、